<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第126号　毎月発行

発行 2022 年（令和 4 年）11 月 16 日　水曜日

2022年（令和4年）11月16日　水曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、69 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて 4 作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

シリーズ　【東北再興のための新産業創出】　第9回

これから世界の半導体地図は大きく変わる！東北がこの変化に乗れる可能性はあるか？カギは膨大な半導体産業人材の育成である！

世界の半導体産業が大激変している！

このところの米中対立が激しさを増す中で、ハイテク産業をはじめとしてあらゆる産業に不可欠な先端半導体とそれを支える半導体産業に大変化が生じ、それは大方の想像をはるかに超えるレベルに来ている。さらには、この先に何が起きるのかまったく想像さえできなくなってきてもいる。

このことは日本ではあまり深刻に受け止められていないが、実は大変なことである。

その変化とは、各国の未来をも左右する半導体産業の主導権争奪の大戦争ともいえるものであり、ある意味では軍事的なインパクトよりもはるかに大きいのではないかと筆者は考える。

そうした大変動とこの東北が無関係でいることはもはや出来ない。否が応でも巻き込まれていく。いや、すでに巻き込まれている。

中国の挑発

なかでも、特に中国の半導体産業展開に巨大な暗雲が立ち込めてきた。

中国は近い将来、技術覇権国家を目指すことを公にしたが、同時にアメリカを追い抜き、世界のトップになるとの姿勢も見せたことが事の発端である。

また現在の中国では、他国製半導体シェアが圧倒的だが、それを「自国技術」による「自国内開発・生産」の国内シェアを大幅に引き上げると宣言したのだ。

そのことに激しく反応したアメリカが、本気で「ツブシ」にかかってきたと思わざるをえない動きがある。

アメリカで長年に亘って開発されてきた半導体に関する技術を、さまざまな手法で「獲得」して、その上に、「自国技術」を付け加えて、中国の半導体産業をアメリカ以上の地位に押し上げると宣言したのだから、アメリカ側が怒るのも理解できるようにも思えるのだが、その反撃がものすごい。

反撃第一弾としてのアメリカ国内生産シフト

最初の一撃は、アメリカから中国に向けての高性能な先端半導体輸出を止めるというところから始まった。

中国もそれくらいは予想していたのかもしれないが、アメリカの「ツブシ作戦」はそこに留まりはしなかった。

次に起きたのは、半導体の世界的分業構造の改革第一弾だった。

それまでは、アメリカの半導体産業は、設計はアメリカ国内だが、生産は主としてアジアという体制で進んできた。

しかしアメリカは、海外に任せきっていた半導体生産の方針を撤回した。

アメリカ国内に多数の半導体生産工場を建設しようと、世界の半導体大手企業の誘致を強引に実施した。

巨額な助成金付きの誘致だったため、誘致に応じた半導体大手企業は多かった。

現在、アメリカ各地でこれらの工場建設がすでに始まっている。

工場を作れば、最先端半導体の主導権を握れるという単純な問題ではないだろうが、とにかく作るというのだから、前進は前進であり、大方針転換である。

これが改革第一弾だったが、しかしここでも終わりはしなかった。

台湾併合問題とTSMC

近年のアジアにおける半導体生産のなかでも、台湾は突出していた。

特にファウンドリーという、生産だけを専門に受託する分野で抜きん出た存在になってきていた。

いまや、世界の先端半導体生産トップである台湾のTSMC抜きでは、世界のハイテク製品の生産は出来ないまでになった。

こうしたところに中国が、長年の夢である台湾併合を堂々と宣言し始めた。なおかつ、武力による併合を実現するとさえ公言し始めたのである。それも大分先のことではなく、今すぐにでも武力併合する勢いで、台湾を脅かし始めた。

事態がここまで進展して、半導体問題と武力による台湾併合となれば、放置はできないと、アメリカが総力を挙げて動き出した。

中国が台湾を併合するとなれば、先端半導体生産トップであるTSMCまで手に入れるということになり、アメリカだけでなく、先進諸国は先端半導体の入手困難に陥るし、少なくとも、先端半導体を中国の外交交渉の手立てに使われてきて、非常にまずいことになる。だから、何としても台湾併合を阻止しようと動いているのである。

半導体生産に不可欠の製造装置まで輸出禁止

近年の先端半導体生産には巨額の投資が必要である。すでに数百億円とかいうレベルではない。一兆円を軽く超える投資が必要で、以前はたくさん存在した半導体メーカーは巨額の投資負担に耐えられず、吸収されたり、撤退したりして、現在はわずかな企業による寡占状態となっている。

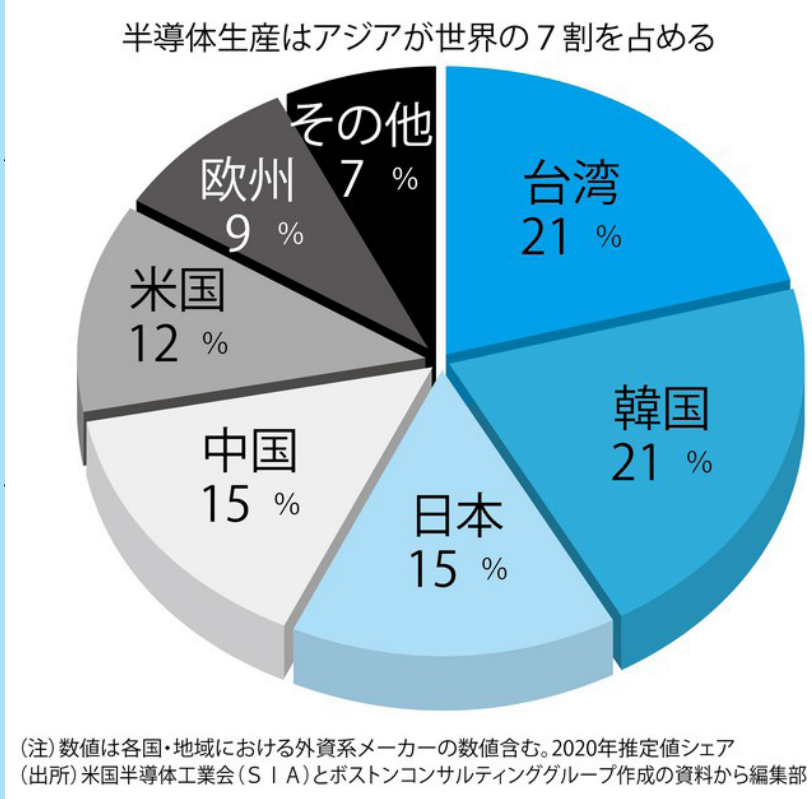
同時に、たくさんの製造工程に配置される半導体製造装置や検査装置も超精密、超高度化して、超専門化、寡占化が進んでいる。

そうした理由から、製造装置や検査装置生産業界への新規参入は非常に困難である。したがって、それらが入手できなければ、半導体生産は出来ない時代なのだ。

この点で、中国は非常に遅れている。海外勢力に依存しているのが実情だ。

また、巨額の投資を行った中国の半国営半導体企業が資金繰りに陥り、救済買収されたりして、自国内開発・生産に行き詰っている。

そうした点をついて、アメリカ製の半導体製造装置や検査装置の中国輸出を実質的にストップしたのだ。



2020 年の世界の半導体生産の中心はアジアで7 割のシェア！・・・これが近いうちに大きく変動する？・・・そして4 位の中国はどうなる？他の西側先進国にそのシェアが奪われるのか？
エコノミストOnLine　2021.5.31 よりグラフ借用

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

現在は、対象を最先端半導体に限っているが、いずれその範囲は拡大していくことだろう。

ここには、アメリカの技術を使っての半導体生産は絶対に許さないという強い意志が見える。

他の先進国も追随中

しかし、アメリカだけがそうした装置の禁輸に踏み切っても、他の半導体先進国が輸出を続ければ、打撃を受けるのはアメリカ企業だけである。

そうしたことを受けて、アメリカの同盟国にも中国への禁輸協力を求めている。

おそらくは、近々、「禁輸同盟」が出来上がることだろう。いや、すでにできているかもしれない。

そうなれば、中国での最先端半導体の生産は、輸入が出来ない環境下での体制にレベルダウンする。

中国では、以前から、自国内の半導体製造装置や検査装置を作れる企業がたくさん輩出するための施策が打たれてきたが、いまのところその可能性は非常に小さいといわざるを得ない。

したがって、「禁輸同盟」が続く限り、最先端半導体の中国国内での生産の未来は非常に暗い。

アメリカの怒りが伝わってくるようだが、さすがの中国もここまでは予想していなかったであろう。

「半導体産業中国包囲網」が着々と形成中

つい先ごろ、ドイツの首脳が中国を訪問した。

それに前後してつい先ごろ、ドイツが、中国資本企業によるドイツ国内にある半導体生産企業への投資申請を突然拒否した。

これまでは、こうした投資は比較的すんなり許可され、ドイツの中国寄りが目立っていたが、ここにアメリカを中心とした「禁輸同盟」の影響を感じるのは筆者だけではないはずだ。

こうして、半導体生産という超ハイテク技術を保有する西側先進国の中国半導体産業に対する「包囲網」が実質的に稼働し始めたといえる。

さらなる追加措置

そして、この「包囲網」はさらに強化される。

最近になって顕在化したのだが、中国に駐在している半導体生産関連のアメリカ人技術者の中国駐在を終わらせ、帰国させ始めた。

すでに設置済みの製造装置や検査装置の技術サポート等は今後どうなるかは想像に難くない。

技術者だけではなく、経営幹部も含んだ動きのようなので、中国企業内での大混乱が目に浮かぶようだ。

そして日本は？

さて、日本であるが、こうした流れのなかで、アメリカの意向に完全に追随しているように見える。

ただし、禁輸措置や技術者等の引上げはまだ実施されていないようだ。とはいえ、時間の問題であろう。

他方、製造装置や検査装置ではトップを走る日本だが、半導体生産となると、数十年前に先頭を走っていた往時の状況とは全く異なり、いまや生産面では大分遅れている。

しかし、これからは生産にも注力するとして、アメリカと強力に連携して、数年後に生産でもトップに追いつこうと必死である。

具体的には、最先端半導体の先を行く半導体の開発拠点を設置し、他方で、同じく最先端半導体の先を行く半導体の生産受託であるファウンドリー事業会社も設立する予定のようである。

そのために、規模はアメリカの七兆円には及ばないが、総額で一兆三千億円を超える助成を決めた。

それ以外にも民間企業の投資による新会社も設立予定と、矢継ぎ早である。

東北はどうするのか？

ここまでがいま、世界の半導体産業に起きている大変化の波であり、日本で起きている変化である。

それに対してオール東北はこれからどう対応していくのだろうか？

現時点では、辛うじて、前述の開発チームに東北大学が入っているくらいである。

それと並行する形で、東北大学内で立ち上がった半導体関連の新たなベンチャー企業もいくつか出ている。

しかし、そうした動きは他の地方も、程度の差こそあれ同じようなものとなるので、他地方に大きく先行することはむずかしい。

また、政府による巨額の助成金も出るので、それの争奪戦が国内でもすでに始まっているであろう。

当新聞でも何度か取り上げた、かつてミスター半導体と呼ばれ、世界の注目を浴びた故西澤潤一氏が活躍した東北大学が、こうした動きのなかでより大きな貢献、あるいは他地方では考えもしないような動きをすることを期待したいものだ。

とにかく、この東北が他地方に先駆けてできることはないのだろうか？

半導体産業のすそ野は広大

筆者は、約三十年間、半導体に関連する企業に勤務した経験がある。その経験からすると、半導体産業は、自動車産業と肩を並べるほどではないが、「産業のすそ野」は想像以上に広範囲に及ぶ。

生産に必要な関連素材も数えきれないほどだし、製造装置、検査装置に関連する企業の種類も多義に亘り、とても数えきれない。

ちなみに、半導体生産プロセスを図で示してみたが、実に多くの工程からなるし、ひとつひとつの工程に関係する企業も数えきれない。

そうした一大総合産業集合体が半導体産業である。

その総合産業が、技術覇権を目指した中国から、アメリカや日本などの西側先進国に大きくシフトしてくる可能性が出現してきたというのが現在の状況である。

日本がこのシフトの流れに乗れれば、大きな経済効果も労働市場の活性化も大いに期待できる。

行き詰っていた日本の産業界が大活性化する可能性がある。大チャンスである。

だから、東北ものんびりしてはいられない。千載一遇のチャンスが訪れようとしているのだ。

生産技術者育成事業

東北に期待したいのは、広範囲に及ぶ半導体生産プロセスに関わる技術者や生産者の養成事業である。

かつて、半導体生産面でもトップを走っていた日本にはたくさんの技術者や生産者が存在していた。

ところが、かつての姿が想像もできないほどに低迷した現在の日本半導体産業では、関係する人材もかなり減少した。

なかには、中国や韓国に働き口を求めて渡った技術者も多いと聞く。

その彼らはこれから国内に回帰してくるだろうが、しかし、それだけでは大いに人材不足である。

大急ぎで技術者や生産者を養成しなければならない。

しかも、最先端の半導体である。高度な人材育成事業が求められるだろう。

最先端半導体の開発が進んだあかつきには、そうした人材ニーズがどんどん膨らんでいくのはほぼ確実だ。

前号の熊本県のＴＳＭＣ進出工場でも千人弱の人員確保問題で大騒ぎである。

本格的に日本で最先端半導体生産を開始するとなれば、雇用者数は熊本とは別次元のものになるだろう。

例を挙げれば、もし日本に台湾のＴＳＭＣのような企業が出現するとすれば、その企業だけで六万人を超える人材が必要で、その企業の取引先企業の人員は少なく見積もっても十倍あるとしたら、六十万人である。

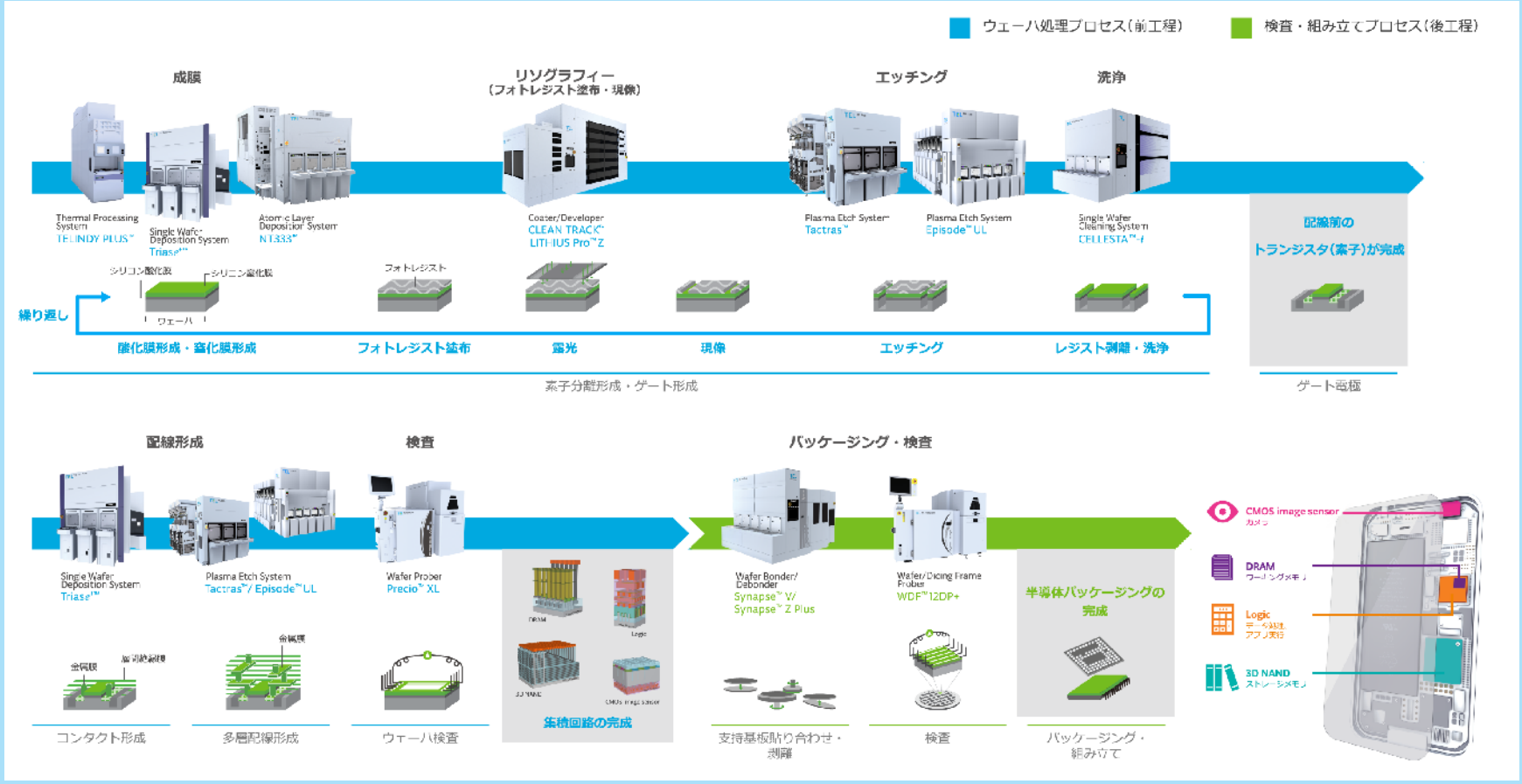
合計で六十六万人の新規雇用が必要となる。

半導体といえば、開発研究者にばかり目がいくが、実際にはそうではないのだ。それらの人材はどう育成するのか？どこの地方が育成するのか？まだ何も決まっていないことだろう。

東北にはここに目をつけて欲しい。しかもこうした人材育成は何も大学には限らない。東北の民間企業にもぜひ担って欲しい。

海外に流出した技術者を講師に招いての学校も設立してはどうだろうか。

見果てぬ夢かもしれないが、そこに賭けていくことは必要ではないのか？



実にたくさんの半導体生産プロセスがある！・・・東京エレクトロンWEB より借用

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東北から発信する【埋もれた歴史を発掘する映像シリーズ】再開

コロナ禍の中、制作済映像3作を踏まえ「埋もれた歴史」の意味を深掘り
いよいよ、その意味を明らかにした映像表現活動の再開である！

コロナ禍での活動中断

長すぎたコロナ禍規制で「埋もれた歴史を発掘するシリーズ映像」は、実質的に、映像上映会も映像制作活動もしばらく中断せざるをえなくなっていた。

一時的に感染数が減少した時に上映会を実施したことがあるが、感染をおそれたためか、来場者は非常に限定的だった。

他方、創作意欲は衰えず、映像企画は増えていった。

とはいえ、実際に活動できないのだから、ストレスもまた溜まる一方だった。

そうした二年半だった。

なぜ埋もれた歴史を発掘するのかを追求

しかし、コロナ禍のなかにありながらもよい成果もあった。

それは、立ち止まって考える時間だけはたくさんあったので、映像によって伝えたいことがより明確になったことである。

なぜ埋もれた歴史を発掘するのか？興味本位で埋もれた歴史を発掘するのではないことは承知していたが、その理由は漠然としていた。それで考え続けた。

そうして行き着いた結論は、埋もれた歴史掘り起こしは、現在という時代を明確に位置づけ、何が問題なのかを洗い出し、さらには「答え」を引き出すためだということに気がついた。

歴史は過去を調べることではないのである。

何をいまさらと言われるかもしれないが、これは非常に大事なことだった。

やはり千三百年前に立ち戻る必要がある

さらにどんどん考え続け、今の日本の根本的な問題は、歴史をはるかに遡って、千三百年前に立ち戻ることだという結論に至った。

これまでも筆者にとって「千三百年前」はキーワードであったが、その意味するところを明確にできた。

千三百年前に現在の日本に至る道筋をこの国が選択したのであるが、別の選択肢も見えてきた。千三百年前はこの国にとって、大きな分岐点だったのだ。

千三百年よりはるか以前も見る

もう一つの視点も発見した。千三百年前の分岐点から、さらに過去に遡っていくことである。

近視眼的な今から見るとなかなか理解するのがむずかしいが、日本の歴史はものすごく長いのである。数万年の歴史が連綿として続いているのである。

しかし、文化という側面からみると、その数万年前から千三百年前までは、ほぼ同一の文化を共有していたと思えてきた。それが、千三百年前に断ち切られた。

そうした見方に至った。

そして東北から歴史を変える

こうした、文化の大きな分岐が起きた主要な場所が東北であった。そのことにもあらためて気づいた。

千三百年前にこの東北で文化の衝突があった。そしてその衝突は、否が応でも、武力の衝突につながった。

そんなことから、今までは「負け続けの東北」と自嘲気味に思っていたが、そのこともよく考えてみた。

その結果、歴代の支配者が、この眠れる獅子ともいうべき東北を恐れたこと、自分たちの存立基盤が脅かされていると思い込んだために全精力を傾けて攻撃したためではないかと思い始めた。自分たちとは異質な何かを感じて畏れたのだ。

そうした衝突が何度かあった。それで、もともと闘う気のない東北は武力では敗れてきたのだ。

さらに、国の支配者は二度と立ち上がれないように東北をいじめ続けてきた。

いよいよ活動再開

そうすると、支配者たちが畏れた「何か」を、映像活動で追及していくことが次の課題となった。

こんなことを考えつつ、停滞する時間を過ごしたのは筆者にとっては幸運だったのかもしれない。

こうして、自分の創作のベースも深掘り出来た。テーマも多数出てきたが、より深い探求も始めつつある。

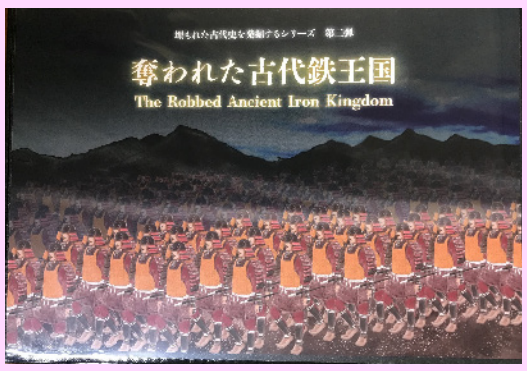
それに少しだけプロらしく、飽きさせない映像、引き込んでいく映像も学習した。

さあ、いよいよ活動再開である。

2020.11.7 初回上映
（東京都東大和市）

【奪われた古代鉄王国】

東北ルーツの日本刀の鉄成分は朝鮮半島経由の西日本や九州と（東京都東大和市）は異なっていた。ということは東北にはもともと鉄資源があったということになる。又鉄の製法も異なる。
朝鮮半島沖の「白村江の戦い」で敗戦した日本には鉄が入って来なくなった。そこで大和朝廷は東北の鉄資源を奪うことを考えた。エミシ征伐とは名ばかりで、鉄を奪おうとしたのが「38 年戦争」の実態。古代東北に多くの製鉄拠点があることも後に判明している。



DVD　【奪われた古代鉄王国】

2020.6.20 初回上映
（東京都東大和市）

【鬼がつくった日本刀】

≪このシリーズ 2 作目≫
日本刀のルーツが、実は古代東北にあることを宮城県にある日本刀博物館の協力を得て映像化した作品である。これは単なる推測ではなく権威ある資料にも記載された真実である。しかし、その裏には東北刀鍛冶たちの悲しい物語が隠されている。彼らは強制的に東北から全国に移住させられたのである。そして「鬼」と蔑まれた。
古代の刀鍛冶の絵に「鬼」が描かれているが、それは東北刀鍛冶たちだ。

DVD　【鬼がつくった日本刀】

2019.3.　24 初回上映
（宮城県涌谷町）

【涌谷7000年の歴史】

≪このシリーズ 1 作目≫
宮城県の北部にある小さな田舎町に、何と 7000 年もの歴史があることが分かった。しかし日本初の金産出以外はほとんど知られていなかったのだ。そこでこれを掘り起こして映像化した。東北にはこうした埋もれた歴史遺産が、たくさん眠っていることだろう。それを掘り起こすと、日本史も変わるのだ。その典型的な例がそこにあった。そして、埋もれた歴史とはまさに消された歴史でもあるのだ。

DVD　【涌谷7000 年の歴史】

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

津軽点描

津軽の「じょっぱり」気質

久々に津軽半島に行く機会があった。青森県の北に突き出た二つの半島、「本州最北端」の称号はより大きく北に伸びた下北半島に譲るが、津軽半島も魅力のある地域である。津軽半島も含む青森県の西半分を占める津軽地方については、古の東北らしさを最もよく残している地域だと私は感じている。一般には、わが国最大のりんごの産地として知られるが、それ以外にもねぶたに代表される独自の文化がある。ねぶたは同じ津軽でも地域によってそれぞれに違う。津軽三味線の音色も他地域の三味線のそれとは全く違う。津軽人気質を表す「じょっぱり」。意地っ張り、頑固者といった意味合いだが、それこそがこうした自分たちの文化を今に至るまで守ってきた原動力だったのではないか。

桑田ミサオさんの笹餅

今回、津軽半島に行くならばぜひとも入手したいと思っていたのが、五所川原市と合併した旧金木町で御年九五歳の桑田ミサオさんが作る笹餅である。無添加、手作りの笹餅が美味しいと評判になって、桑田さんは何と七五歳で起業して、以来二〇年笹餅を作り続けてきた。そのこだわりぶりがまたすごい。笹餅に使う餅米と小豆は自分で栽培した有機栽培のもの、包む笹の葉は自ら山に入って週に二〇〇から三〇〇枚も取ってきていたそうである。このこだわりぶりこそまさに津軽の「じょっぱり」気質そのものではないか。

店頭に並ぶとあっという間に売り切れるこの笹餅であるが、さすがに体力的に厳しくなってきたため、今年で引退されるとのことである。その前に入手できてよかった。袋を開けてみるとまず笹の葉のいい香りが漂ってくる。笹の葉を開くと餅米と小豆と砂糖だけで作られた餅が顔を出す。食べてみると、余計な味のしない、シンプルでかつ奥深い餅米と小豆の穏やかな旨さが印象的である。人気のほどが窺える。

桑田ミサオさん手作りの笹餅

桑田さん、自らの引退を前に、笹餅の作り方をオンラインなども駆使して惜しげもなくいろいろな方に伝えているそうである。桑田さんは引退しても、桑田さんが工夫して編み出した笹餅はなくならない。ありがたい限りである。

生者と死者がつながる霊場

同じ金木にある「川倉賽の河原地蔵尊」は、津軽を代表する霊場である。ここは生きてる人と亡くなった人がつながる場所である。「イタコ」と言うと、下北半島の恐山が有名だが、ここにもイタコがいて、毎年の例大祭には津軽各地からイタコが集まり、亡くなった人と話したい人が大挙して訪れる。

本堂には御本尊の地蔵菩薩の他に、それを取り囲むようにところ狭しと２０００体あるというお地蔵様が並ぶ。あちらの世界を歩くためのわらじや汗を拭うための手ぬぐい、あちらの世界で着る着物、小さい子のための風車などが奉納されている。

本堂だけではない。境内の至るところにもお地蔵様が奉納されている。本堂の隣の人形堂には、あちらの世界で伴侶を得て幸せに暮らしてほしいとの願いで奉納された新郎新婦の人形があまた収められている。すべてこちら側にいる人からの、あちら側にいる人への祈りが形になったものである。これら奉納された様々なものの数だけ祈りがある。

寺務所にいた方に話を聞くことができた。イタコの口寄せと言うと非科学的なものと受け取られやすいが、実際に口寄せで話を聞いた人からは、当人同士しか知らないはずの話が出てきて驚いた、といった話を聞くことも少なからずあるそうである。

狐たちの安息の地

隣のつがる市の旧車力村地域にある「高山稲荷神社」は、入り口から拝殿への道を上って、反対側に下りたところにある龍神宮から神明宮に至る道に奉納された「千本鳥居」で有名である。緑豊かな境内の中に続く真っ赤な鳥居は、この神社の名を有名にしている。ただ、この神社のすごさは実はそれだけではない。ここは、守る人がいなくなった各地の稲荷神社の祠や狐の像などが送られてくる場所でもある。千本鳥居の「終点」である神明宮の裏手にそうした狐の像や祠が、こちらもまたところ狭しと並んでいる。狐たちの表情も何となく穏やかに見えるが、ここは彼らにとって安息の地なのかもしれない。

高山稲荷神社の千本鳥居

中世の一大港湾都市十三湖

五所川原市と合併した旧市浦村にある十三湖。今では他の地域のものよりもはるかに大粒のしじみを使ったしじみ汁やしじみラーメンで有名な静かな地域であるが、中世、この一帯は、十三湊（とさみなと）と呼ばれる一大港湾都市を形成していた。古文書に残された記録やそれまでの発掘調査の結果から、当初は鎌倉時代から室町時代に栄えたとされてきたが、その後の発掘調査で平安時代後期の遺物が出土したことから、この地の成立がそこまで遡ることが明らかになった。伝承としてはここに奥州藤原氏の流れを汲む豪族がいたとの話もあり、その意味でも今後のさらなる調査で何が分かるか楽しみでもある。これまでの調査における成果は、十三湖から橋を渡って行ける中の島にある「市浦歴史民俗資料館」で見ることができる。

中世の山王坊の遺跡が残る日吉神社は、大きな杉並木と苔むした参道が印象的な荘厳な雰囲気の場所である。こちらも発掘調査が進み、往時の姿がどのようなものであったか判明してきている。福島城、唐川城といった城址共々、津軽半島に大きな都市が存在した当時を想像しながら散策するのも楽しい。

全国から集まったたくさんの狐たち

生者と死者とが交わる川倉賽の河原地蔵尊

眺望随一の眺瞰台

津軽半島の北端は有名な龍飛崎であるが、こと景観から言えば、そこに行く途中の高台にある眺観台の方が上である。津軽半島を見渡せ、晴れていれば対岸の北海道もよく見える。その龍飛崎は、岬の手前にある国道三三九号線はここだけ全国で唯一、階段であることで有名である。当然ながら、車は通れない。なぜそんなことになったのか諸説あって定まらないが、明治になってから中央の役人がよく確認もせずに国道に指定したのかと想像してみる。

中世の繁栄を静かに伝える十三湖

五能線の車窓から見える岩木山

津軽を堪能できる五能線

津軽地方を堪能するのにふさわしい路線が、ＪＲ五能線である。南津軽郡の田舎館村にある川部駅と秋田の能代市にある東能代駅を結ぶローカル線である。週末は臨時快速列車「リゾートしらかみ」が青森駅から秋田駅まで運行する。

車窓からの風景が変化に富むのが何と言っても魅力で、リゾート列車らしく大きく取った窓からはまず津軽を代表する秀峰岩木山が見え、今の時期は沿線にたわわに実ったりんごの木が綺麗に見える。社内では津軽三味線のライブも行われ、旅情を掻き立てられる。鰺ケ沢駅に着くとそこから先は日本海の景色が待っている。ただ、八月の豪雨で鰺ケ沢から東能代までが不通で、現在、そこから先は代行バスでの移動となる。ＪＲ五能線と並行して走る国道一〇一号線も至る所が片側交互通行で、改めて豪雨被害の大きさを実感した。一刻も早い復旧を祈りたい。

眺瞰台から望む北海道

五能線代行バスから見える日本海

お勧めしたい津軽巡り

もとより津軽地方も、他の地域同様に人口減少や過疎化が課題である。しかし、この地域には中世、さらに遡れば三内丸山遺跡に代表される縄文時代の繁栄以降、脈々と受け継がれてきているものがあるように感じる。同じ東北でも独自の気風、雰囲気を感じる地域である。他地域の人にはもちろん、ぜひ同じ東北の人にも足を運んで巡ってみてほしい地域である。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東北の謎に注がれる熱き視線！北奥に隠れ住んだ女神たちの事

かなり以前、古代史研究家・関裕二氏が独自の歴史解釈を展開する書籍を本稿で取り上げた事があるが、最近インターネット上で東北にも纏わる面白い歴史関連動画を発見したので紹介してみたい。意外にもその製作者はかなり若い世代のしかもいかにも学者然としたタイプではなく、髪を染め口調も軽い一見歴史になど詳しくもなさそうな関西弁の二人組『TOLAND VLOG』のサムとマサキである。しかし実際は意外な程込み入った内容をわかりやすく且つ情熱的に、笑いも交えながら短時間のうちに解説していくもので、観る側も相当敷居が低く感じられ誰でもすっと入っていけそうな雰囲気がある。

奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

こうした趣味的歴史研究について回る問題として、「偽書」とされている文献との対応があるが、彼らが取り上げるのは「正統竹内文書」といって、かつて某新興宗教の教典にもなったという教祖・竹内巨麿による「竹内文書」の誤りを正す為、本来は決して表に出る事はない武内宿禰の末裔竹内睦泰が、これも本来は門外不出の「口伝」（十二の長老家が口承してきた内容）をまとめ一部公開したものという事である。

これも古事記・日本書紀といった所謂正史たる文献とは異なる、つまり歴史を覆す内容に満ちているが、一方で天皇家の先祖が世界中を巡り、各地の古代文明を起こしたなどという書き出しもあり、当の公表者・睦泰氏も全て真実とは思っていないのだと言う。只、本書は記紀の編纂にも関わった武内家が歴史の真実のヒントを込めて隠れ伝えてきたものであり、正史と文書の記述の違いから時の「勝者」が闇に葬ろうとした事実が垣間見えるといい、また当の文書すら隠さざるを得ない事柄をも実在の神社社伝や地理的要素などを交え独自に推理しようというのが当動画の目的のようなのである。

真偽不明の書物を題材とする事、また正史を否定し現・皇室の秘密に踏み込む内容もある事で検閲・削除処分を受ける怖れもある為（実際事例があるらしい）当人らも冒頭で必ず「飽くまで都市伝説として、エンタメとして楽しんでください！」と断りを入れている。ちなみに彼らの他にも世界の伝説などを追う関西の若者コンビによる動画もあり、こういった謎探究が今の西の潮流なのかと感じもする。故に、と言うべきか、抜群に話が上手い訳だが、ならば東北にはさほど関係がないのではと思われるところ、実は全くそうでもないのである。むしろ中央が舞台の古代史を紐解いていけば、その結末は必ず東北へ行き着く―そう彼らは言い切りさえするのだ。

中央の政権争いに敗北し東北へ逃れた可能性のある人物の中にはよく知られる伝説上の存在の他に「まさかそんな人まで？」と思われる出会いもあり、新たに驚かされたのである。

正統竹内文書と記紀はどういう点が違うか、例としては縄文時代やユダヤ渡来の記述の他、神々になる以前のスサノオなど王族の系図上の入れ替えがあり、ある女帝の子として記紀に記された皇子が実は夫であり何代にも渡るはずの出来事が実は文書では一代で終わっていた、というような事があるが、本稿では当動画でも最も力の入っていた感のある「女神」たちの系譜に絞り綴ってみたい。

＊

女神、といえばここ東北にも、即脳裏に浮かぶ秋田県田沢湖の辰子姫や遠野三山の女神、宮城県でも地名にありながら正体の不明な志和姫など数々の伝承や謎が存在するが、今回の主役はその東北にも多く祀られ全国的に篤く崇敬される、言わずと知れた「総氏神」天照大神、正体が不明で謎が多いとされる豊受大神や瀬織津姫である。彼女たちこそ、記紀編纂の中心人物・藤原不比等によって隠され封印された古代史の象徴的存在と言っても過言ではあるまい。

何故隠されたか？大化の改新以後の皇室の系統とは別のもしやすると「本流」たる国家支配者の姿がそこにある故とも言われる。

まずは「古事記」にて伊弉冉命の生んだ女神の一人という僅かな記述しかないながら、かの伊勢神宮に天照大神直々の指名を受け、且つ同格に祀られる豊受大神の謎であるが、「彼女」は渡来系秦氏の祀った稲荷の神・宇迦之御魂神と同一であり、伏見稲荷の祝詞に世界創造の「唯一神」と謳われた、明らかに神道とは異質の神であった。

造酒・機織り・稲作などの技術をもたらした未曾有なる渡来一族の神と、天照大神が何らかの契約を結んだ形跡が童謡「かごめかごめ」に秘められているとサム氏は言う（詳細は省く）が、国家最高の太陽神を自負する天照大神と宇宙そのものであるという外来の唯一神、異なる概念の最高神同士の融合を図ったのが、伊勢神宮という事なのか。

サム氏によれば、自身は所謂「日ユ同祖論」の支持者ではないが、研究するとどうしても渡来系一派としてのユダヤ人の痕跡に触れぬ訳にはいかないのだと言う。それがイスラエルの標語にあるという「我々は月の民」にも表される神話上の神「月読命」の存在であり、豊受大神も、そして同様に天照大神の「荒魂」として伊勢神宮に祀られるという瀬織津姫もまた「月」の属性を持つ神であるという事実に行き当たるのだ。

この瀬織津姫もまた記紀には全く語られぬながら、天照大神と同一とされる謎深き神だが、「彼女」が隠された理由は、実は伊勢神宮に祀られた天照大神が女神ではなく男神であったからであるという事が、やはり偽書とされる古史古伝「ホツマツタヱ」そして正統竹内文書に語られているというのである。

天照大神という名は実は個人名でなく世襲する役職名に近いものであり、彼―大和の王・饒速日命（出雲・月読の血を引くという）はかつてスサノオがその時代の「敵国女王」アマテラスとの間に儲けたスセリ姫のそのまた娘である下照姫を妻とした事で最高神アマテラスの称号を引き継ぐ。

正確には古代の王は祭祀王と統治王のセットであり多くは女性であった祭祀王―つまりこの時は下照姫―がより上の立場であった。（魏志倭人伝に記された卑弥呼とはこの祭祀王の事であり第八代孝元天皇の娘が当てはまるという―「邪馬台国」即ちヤマト国は九州と畿内を何度か移動していたと竹内文書は記す）

下照姫の兄・阿遅志貴高日子根神は大国主とスセリ姫の子即ち事代主であり、出雲を抜け大和へ入って現地の王・饒速日に自らの妹・下照姫を嫁がせたのだ。

事代主は更に、西よりイワレビコつまり後の神武天皇が東進してきた際、今度は大和を抜けてイワレビコに通じた。と言うのも、彼は大戦を避ける為に政略結婚を画策したが、大和の老将・長髄彦はこれに強硬に反対し和平交渉決裂の危機に直面していたのである。

この時、事代主が大和から神武に嫁がせようとしていたのが、当時既に死の床に着いていた饒速日王と下照姫の娘つまり自らの姪であったのだが、結局長髄彦の妨害により果たせず実際に神武に嫁いだのは事代主自身の娘であったという。

こうして後代の天皇の系統が始まった訳だが、祭祀王（これが瀬織津姫という称号で、やはり世襲制であったとサム氏は説く）であった下照姫は大和を譲る見返りとして伊勢神宮に饒速日王と自らを祀る事を求めた―といった顛末である。

さて、戦死したとも謀殺されたとも言われる大和の武将・長髄彦だが、実はその兄・安日彦が、あるいは兄弟ともに東北に逃れたという説も有名である。となれば、彼が政略結婚の策謀から守り抜いたとされる下照姫の娘はどうなったか―饒速日王と下照姫には高倉下・別名天香久山命という男子と「御歳神」と記録される、やはり正体を隠された子がいた。事代主と同じく神武の元に走ったとされる高倉下は一方で霊山・香久山の主でもあった。香久山の樹木は天岩戸開きでも使われるなど祭祀色の強い場所であり、それを根拠としてその妹と思われる祭祀王・御歳神の拠点でもあるとしてその真の名を「かぐや姫」と説いたのである。

日本最古・作者不明の創作文学という『竹取物語』―血縁のない老人に守られ、帝の求婚をも拒み、遂には月に帰っていくかぐや姫の物語は、これら古代史の真実を解くキーであり、月とは即ち彼女の祖先である月読（ユダヤ）の国、あるいは長髄彦やその一族が向かったとされる東北に、彼ら渡来人のコミュニティが存在したのではないか―として、当動画シリーズの締めとしているのである。

実は、かぐや姫のモデルとされている人物は歴史上に何人かおり彼女の向かった先としては富士山そのものだったという説もあるが、個人的には他ならぬ自らの地元山形県の霊峰であり、山頂にこれまた他ならぬ月読命を祀るその名も月山が思い浮かんだのである。只少し調べてみたところではそのような伝承は確認できなかったのだが当動画では更に北の鳥海山に饒速日の降臨伝説がある事に言及、出雲・物部の始まりの地としてあらためて東北を最重要の地と認めるのだった。

月読＝ユダヤの血を引く唯一の祭祀王・かぐや姫という、現天皇とは違うもう一つの王統が東北に渡ったという話は、月山に通じる羽黒山に辿り着き、聖地を開いたとされる第三十二代崇峻天皇の子・蜂子皇子を想起させる。天皇を導するとされる八咫烏（事代主創始の隠密組織か）に伴われた皇子はかつてこの地に渡ったかぐや姫の足跡を追って入山したのだろうか。

＊

『TOLAND VLOG』では、更に日高見国やアラハバキ神、阿弓流為・母禮の回も設け、どれも情熱的に語り通している。従来のような書物ではなく、またテレビでもない自由動画で個人の関心と熱意を多くの人に観て、聞いてもらう―そうして、他地方からの広い視野を元に語られる東北の真実や可能性がいつの間にか人々の心に浸透していくとしたら、それもまた面白い時代だなと思う。

それにしても、確かに関西の若者は語りや表現が巧みであるのだが、もし逆に東北の若者たちがこれを受け自らの地を語り始めるなら、どのような事になるのだろうか―それもまた密かに期待しながらも、老兵もまだまだ負けていられないな、と気を吐いてもいたいと思ったのである。

かの「姫神」が帰っていった、
月の都とは・・まさかの!?

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

ハマギクと蝶

朝露とクモの巣

西日を浴びる集落

シリーズ　遠野の自然

「遠野の立冬」

遠野 1000 景より

最近の口ぐせとしてすっかり固定化してしまったが、今年のここまではほんとに目まぐるしかった。

周囲を取り巻くあらゆる環境がグルグルと猛スピードで回転し続けて、何度も振り落とされそうになった。

だから、ずっと緊張し続けていなければならなかったが、それだけで心身ともにくたびれてしまった。

そこに年齢の衰えも加わり、すこぶる芳しくない。

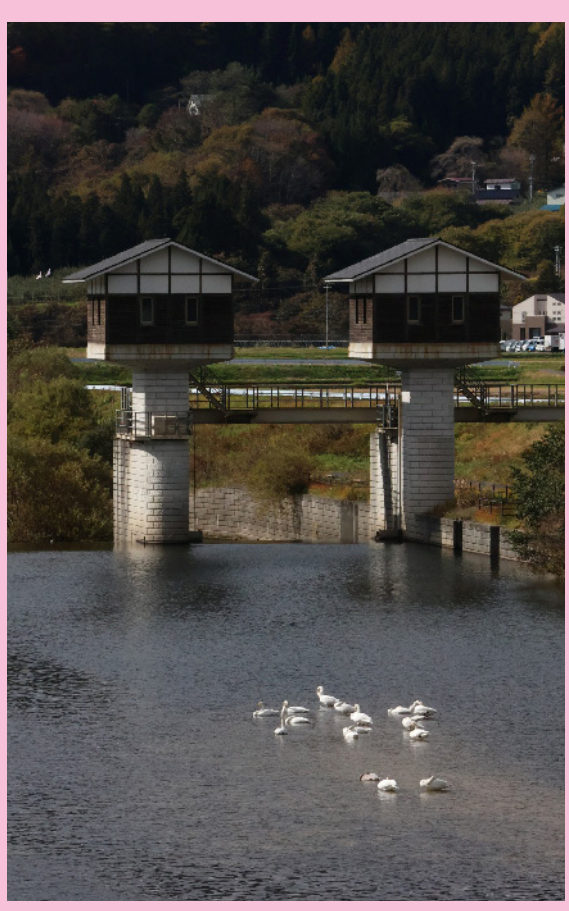
そんなとき、心に染みわたるような風景に出会うと、身体の奥底から「こわばったもの」が急速に溶け出していくのを感じる。

徐々に大自然のサイクルに馴染んでいっているということなのだろうか。

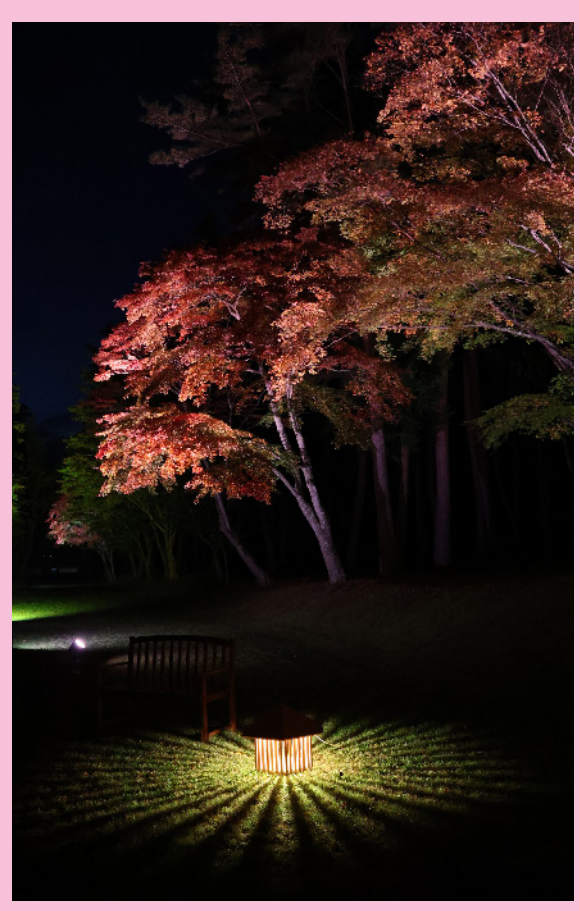
ススキと六角牛山

雲海と日の出

朝日を浴びる裸木



今年も白鳥飛来



紅葉ライトアップ

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

【新シリーズ・三陸酒海鮮会】の既開催ご報告と今後のお知らせ

第46回は10/19に開催済、あの十四代と新政をいただきました！
第47回は今週末ー11/19の開催、第48回は12/17に開催予定

【基本方針】

① 会は原則として、月一回開催といたします
② 毎回会場を変えての少人数開催といたします。
③ 今後は、当面の間、毎回、「割り勘」を基本とした料金でお願いいたします。

第 46 回三陸酒海鮮会　東神田【むさし乃】篇
【十四代と新政 NO.6 と・・・・】

十四代　中取り純米吟醸

十四代　生詰　純米吟醸

新政　NO. 6

新政　亜麻猫

第 47 回三陸酒海鮮会　日本橋【冨和利】篇
2022・11・19(土)　17：00～20：00

宮城の地酒 10 種飲み放題！・・・地酒イメージ

第 48 回三陸酒海鮮会　新宿【樽一】篇
2022・12・17(土)　17：00～20：00

鯨刺し盛り合わせ・・・イメージ

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする

東北の風景

【東北の鹿と城】

写真撮影　尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.